

青 衿

2 0 2 3 春 号



東京都立大学
文藝部

◇青衿（せいきん・あおえり）◇

《『詩経』鄭風・子衿の「青青たる子が衿」の句の注、「青衿は青い領なり、
学子の服するところ」から》学生のこと。

—『大辞林』第二版・小学館より

目次

小説

お菓子の家の耐震工事

風影露

3

忘れないでね

五月螢

7

部員紹介

31

連絡先一覧

33

奥付

34

お菓子の家の耐震工事

風影露

村はずれの深い森の奥にはお菓子の家があって、そこには魔法使いが住んでいるという噂があった。科学が発達した現代においてそんなおとぎ話を信じるなんて本当に小さい子供だけで、多くの大人が、それは小さな子供が危険な動物や植物が存在するかもしれない深い森に入らないようにするための作り話だと知っていた。しかし、少し考えてほしい。なぜ魔女が住んでいるのは薄気味が悪いねじくれた館ではなくて、お菓子の家なのか。それは森に魔女が住んでいることが本場で、その魔女は可愛いお菓子の家に住んでいるからだ。そのことを彼だけは知っていた。

彼は彼がまだ少年だった頃、森でウサギを追いかけていて迷子になったとき森の魔女に助けてもらったことがあった。魔女はとても優しい女の人で、甘いお菓子をお土産に持たせてくれると、「もう一人で森に入っただめよ」と怖い顔をわざと作って言った。

「ごめんください。どなたかいらっしゃいませんか？」
その時の少年は数年たってもう青年と呼べる年になり、今度は迷ったのではなく自分の意志でお菓子の家のチョコレートでできた扉を叩いていた。

「またあなたなの。今度はなあに？」
扉が小さく開いて、うんざりした顔の女の人が出てきた。

「お菓子の家にも耐震工事が必要なんじゃないかと思つて」

「どうしてそんな考えになったの？」

彼が要件から先に言っていると、魔女は呆れたような顔をしながらも彼を家の中へ通した。どんなに馬鹿らしいと思えるような要件でもとりあえず話を聞いてくれるところが彼女の良いところだ。顔なじみの青年の話なら特に。

「前からこの家はどうやってこの形を保っているんだろうって考えていたんです。柱らしい柱も無くて、壁も分厚いクッキー一枚。クリスマスに作る小さなお菓子の家と変わらない」

青年はいそいそと持ってきた紙を氷砂糖のテーブルに広げた。魔女はすでに話に対する興味を失っていたが、遮らずに彼が最後まで話すのを待っていた。彼は自分で作ったお菓子の家を使っていかに揺れに弱いかを伝え、次に紙を用いて何やら細々としたことを説明し始めた。「……というわけで、快適な生活のために改善が必要です」

自信満々の表情で言った青年に、魔女は呆れたような視線を向けた。

「魔女の作ったお菓子の家に魔法以外の何が必要だつていうの」

その言葉に青年はがっくりと肩を落とした。自信満々に広げた紙をすぐごと丸めると鞆にしまう。様子を見ながら魔女はため息をついた。

「私には魔法があるから誰も必要ないっていうことをいつになったら理解してくれるのかしら？」

「でも、どうしてもあなたの側に置いてほしいんです」
この青年は少年だったころからそう言って何度もこの家に押し付けてきていた。弟子にはしないというと、

初めは薬草取りの役にたつと植物学を学んできた。次に薬作りの役に立つと薬学の勉強をしてきた。その路線で上手いかないと分かると、快適な生活のための道具を作るとか言ってそっち方面に行ったこともあった。しかし向いてなかったのかその時は何の成果もなくすぐにすぐ帰ってきた。間は数か月の時もあつたし、何年の時もあつた。彼は何年間もそんな外れの努力をしていた。今回はとうとう建築にまで手を出したらしい。

「次は何をするのやら……私を楽しませるために大道芸でもするつもり？」

魔女が皮肉っぽく言うのと、青年はそれだというように目を輝かせた。

「さっそく弟子入りしてくるよ！楽しみにしてて」

魔女が止める間もなく青年は家を出て行った。次に家を訪ねてくるのはいつのことやら。少なくとも数か月は先のはずだ。そうやって次々と新しいことを始めるからいつまでたっても役に立てないということに青年は少しも気が付いていない。そして、役になんて立たなくても、この優しい魔女は訪ねてきたものを決して追い出し

たりしないことも。

(まったく世話しない子ね)

次来るのはいつだろうか。どうせなら夏が始まる頃に
来ると良い。森にたくさん実った果実で作ったジャムが
たくさんあるはずだから。

おわり

忘れないでね

五月蝂

——ああ、死ぬのか。

微睡に吞まれながら、男は己の脇腹に触れた。

すでに視界は滲み霧のように霞んでいたが、それでも手に残るべつとりとした感触の正体くらいは確かめることができた。滑るように輝く赤色の液体。それが絶えず男の体から流れ出している。体の一部が失われていく様を認めて、初めて体が痛みを理解した。

肉を引き裂くような痛みが脇腹に走る。全身が燃えるように熱い。

——恨みはしない。だが……。

激痛と死への恐怖に襲われながら、しかし男の心は静まり返っていた。

——最期くらいはせめて、太陽の下で迎えたかった。

真つ暗な洞窟の中、冷たく硬い岩壁にもたれながら男は小さく笑う。それは自虐とも、あるいは安堵とも取れる笑みだった。

瞼が重い。

——このまま全てを忘れて、消えていくのも悪くないだろう。

漣のように引いていく意識の中で、男はそんなことを考えた。弄ばれるままに生きてきたのだ。今くらいはゆつくりと、静かに——。

「あの、大丈夫、ですか？」

ふと、近くで声がした。予想だにしていなかった刺激に、微睡に沈んでいた男の意識が浮上する。

「何これ、酷い傷……！　しっかりして、今外に運びますから！」

幻聴かと思ったが、違う。声は確かに男の側から聞こえ、指が触れた。腕が腰に回り、男の体を持ち上げようと力がかかる。

薄れゆく意識と暗闇のせいで、目の前で何が起きているのかを確かめることはできない。だが、知らない女——それも声色からして少女——が己を助けようとしていることは理解できた。

——離せ、構うな。

捨てていけ、と声にしようも口が思うように動かない。指も、体も、すでに力が入らない。ただ、己より幾分も小さな体躯の少女に寄りかかり、引きずられるようにして体が動く感覚だけがどこか遠くにあった。

——ああ、クソ。

体が揺すられ、忘れていた激痛が再び全身を駆け巡る。痛みから逃れようと意識が再び遠のいていく。

——ようやく、静かになれたのに。

意識が、暗闇に落ちた。

「……どこだ、ここは」

視界に広がる木目色の天井を眺めながら、男はベッドの上でそうつぶやいた。

見知らぬ部屋だ。木組テーブルと椅子、衣装棚に白塗りの土壁。街道沿いの宿屋であれば何処にでもあるこれといった特徴のない部屋だったが、男は確信を持って断ずることができた。こんな部屋は、知らない。記憶の断片を手繰り寄せて像を結ぼうとするが、体を包む重い

倦怠感が邪魔をする。

ただ漠然と、敵地かもしれないという危機感だけが全身を支配していた。男の体は今ほとんど裸だ。武器はない。戦えるものを探さねば。窓を破ればナイフにはなるか。テーブルの足を折れば槍に。あるいは——。

凄まじい速度で思考を巡らせながらも、しかしどこか浮ついた意識で部屋の中を見聞していると、仕切りの奥からひよつこりと何者かが顔を覗かせた。

「あ、起きたんですね！ よかった。ずっと動かないから、もう目が覚めないのかと……」

——女？

少女だ。男よりも二回りほど小さい、見知らぬ少女。それが安堵の笑みを湛え、パタパタと足音を立てながら男に駆け寄ってくる。

無防備な動きに違和感を覚えながらも、牽制に拳を握ろうとして——気付く。指が動かない。

指だけではない。腕が、足が——全身が、鉄の塊のように重く、男の意志を拒み続ける。

「熱は……うん、大丈夫そう。包帯は……後で変えない

と。傷はまだ痛みますか？」

「……………いや」

少女は無遠慮に男の体に触れては、ボソボソと呟き、時折男に言葉を投げかける。今、男は、敵地のご真ん中かもしれない場所で見知らぬ少女の触診を無抵抗に受けるしかなかった。抵抗できない。その事実だけで、己の状況に対する恐怖が何倍にも膨れ上がる。

しかし男の心を支配していた疑心も、少女の触診が進むにつれて次第に消え失せていった。

——こいつに敵意があれば、俺はすでに何十回も死んでいるのだろうか。

どれだけ時間が過ぎようと少女は男に危害を加える様子もなく、周囲に少女以外の気配もない。そして己の脇腹に残る鈍い痛みと、それ誤魔化すように巻かれた包帯を見れば、彼女が男に何をしたのかは容易に想像できた。

——ひとまず、敵意はないのだろう。

敵意もなく、伏兵もない。危険はなく、与えられるのは無償の善意。

——ならば、この少女は、一体……。

「あ、そうだ！」

何かを思いついたのか、少女は突然弾けるように立ち上がった。刹那、男の体に緊張が走り、自ずと全身が強張る。

「お腹空いてますよね？ 私、何か作ってきます！」

「は？」

続いたのはなんとも気の抜けた言葉だった。硬直した全身が弛緩し、力が抜ける。

「嫌いなものとかありますか？」

「……ああ、いや……なんでもいい……」

——なんだ、この会話は。

己の状況に酷くアンバランスな違和感を覚えながらも、男はただ、部屋の奥へと小走りに消えていく少女の背中を見つめることしかできなかった。

「はい、あーん」

——殺してくれ。

差し出されるスプーンを眼前に、素直に口を開く。野菜と豆を湯がいたスープが口内に注がれ、咀嚼。全身傷だらけの筋肉質で強面の男が幼気な少女に看病されて、挙句の果てに「はい、あーん」。

男のプライドと羞恥心がズタボロに引き裂かれるには、十分すぎるほどの状況だった。

「食べられますか？ 一応、味付けは薄めにしておいたのですが……」

一拍おいて、感想を求められているのだと気付く。

「ああ……まあ、美味しい」

特に嘘をつくこともなく、素直に言葉を口にする。男は他人に何かを語ることに慣れていなかった。自然、食事の感想もありきたりで味のないものになる。しかし少女は男の返答に安堵したようで、ホッと息をついて胸を撫で下ろしていた。

スープの温かさが疲弊した体を解し、久々の食事を経て全身に力が漲る感覚を覚えながら、男は己の状況を整理しようと試みる。ジクジクと痛む頭を振り曖昧な記憶を呼び覚ます。意識に深くかかった霧もすでに殆どが晴

れていた。アジトへの敵襲。防戦一方となる籠窟戦。倒れていく仲間たち。僅かに残る力を振り絞り敵を殲滅させたものの、己もまた重傷を負い――

「お前に助けられた、と」

「そういうことです。よかった、記憶の方は大丈夫みたいです」

ようやく記憶を取り戻した男を見て、少女は満足げに頷いた。

――我ながら、情けない話だ。

血みどろの中で死ぬはずが名前も知らぬ少女に助けられ、こうしてまんまと生きている。

――これが恥でないなら、なんなのだろうな。

「要求はなんだ。金か？ 労働か？ 救ってもらった命だ、ケチはつけん」

「え、ええ？ ちが、違いますよ。要求だなんて。私はただ、怪我してたから助けただけで……」

少女はブンブンと手を振り男の言葉を遮る。理解できなかった。命を救っておきながら見返りを求めない。助けたのが男でなければ――いや、男だったとしても、彼

の体が満足に動いていれば命を失っていたのは少女の方かもしれない。危険を冒しておきながら何も求めてないと言う。貴方が助かっただけでも満足なのだと言う。

男には理解できない価値観だった。

「それに……貴方には、謝らなくちゃいけないことも、ありますから」

それもまた、理解できない発言だった。身に覚えがない。命を救い、食を与え、何も奪わず、その上謝罪までしなければならぬと言う。これが無償の善意というならば、男にとっては甚だ居心地の悪いものだった。

「その……貴方以外の人は、助けられなくて……ごめんなさい」

少女は首を垂れ、神に赦しを乞うようにポツリポツリと言葉を紡ぐ。弱々しく、消え入りそうに。気付けば少女の頬には一筋の涙すら伝っていた。

「い、いや、気にするな。その、アイツらは家族でもなんでもない。お前が気に病むようなことでは……」

「それでも、助けられ、なくて……」

「待て、待てくれ。頼む、俺にそんなことを言われる資格はない」

少女の泣き声は次第に激しさを増していく。言葉が曖昧になり、鼻水を吸る音が混じった。

——わからない。

しゃくりあげるような声が連続し、やがてそれすらもわからないほどの感情の滂沱に少女の全てが押し流される。

——理解できない。

なぜこの少女はこんなにも涙を流しているのか。洞窟の中で死体の山に紛れ偶然生き延びただけの男のために、どうしてこんなにも涙を流せるのか。

——俺は、涙一つ流していないというのに。

救った命だけでは飽き足らず、救えなかった命のことまで抱え込み、苦しみ、涙を流している。

——ああ。

理解を放棄すると同時に、男の胸中にある種の達観が訪れた。

——この子は、こんなにも誰かのために泣けるのか。

シーツの裾を握りしめ泣きじゃくる少女の背中を訳もわからぬままにさすりながら、男はぼんやりとそんなことを考えていた。

「――盗賊の一味、ですか？」

「まあ、そんなところだ。俺も、俺以外も、あの洞窟の中にいた奴らは全員何してきたか分からん無法者どもの寄せ集めでしかない」

落ち着きを取り戻した少女に男は己の正体を明かした。企みがあつてのことではない。ただそうしなければ、罪悪感で潰れてしまいそうだった。

「寄せ集めと言っても一つにまとまっている訳じゃない。縄張りや思惑……まあとにかく、幾つもの細かい集団に分かれている」

そしてそれらの派閥は利益や発言力を巡って互いに対立し、時として抗争に発展する。

「大方、誰かが金に釣られて情報を流したんだろう。あの日、俺のいたアジトは襲撃を受けた。その結果が、ア

レだ」

「そんな……」

「すまない。偶然とはいえ、見せるべきではないものを見せてしまった」

「私は、大丈夫です。でもあの人たちは……」

「所詮まともな人生は送れん無法者どもだ。殺されたことに恨みはあるかもしれんが、救われなかったからといって恨める道理があるような人間じゃない。そもそもお前があの洞窟に足を踏み入れた時点で、俺以外に息のある奴はいなかった」

――だからもう、気にするな。

そう続けようとして、やめる。言つたところでどうせこの少女は涙を流すことを厭わないのだろう。

「俺自身人に語れるような人生は送っていない。この両手はとうに血で汚れている。本来、お前に救われていいような人間じゃない」

男はただ、知って欲しかった。己が涙を流されるに足る人間でないことを。仲間を失ったことを悲しまれるに足る人間でないことを。

——まるで、言い訳だな。

ただ己が流せぬ涙を少女に流させることを嫌い、逃れようとしているだけの自分勝手な身の上話。犯罪者なのだと言って欲しかった。罪を暴いて欲しかった。罵って欲しかった。それなのに、この少女は——。

「それでも、貴方を助けたことを、私は後悔なんてしません」

失われていい命などあるはずがないと、男に微笑みを向けるのだ。

——苦しいなあ、全く。

未だ鈍く重い体を持ち上げてベッドから降りる。服はすでに返してもらっていた。

「世話になった」

「え？ ど、どこに行くんですか？」

「どこでもいいだろう。少なくともお前の迷惑にならんところに行くさ」

「ちょ、ちよつと、まだ治りきってないんですから、安静にしないで——」

「おかげで随分と良くなった。じきに治る」

力の入らない足に無理やり力を込めて扉を目指す。十メートルにも満たない距離なのに、まるで砂漠を裸足で歩いているかのように、男の全身が熱を帯びる。上手く息が吸えない。粘り気のある汗が頬を伝う。己の体が完治していないことなど男にもわかっていてた。ただ今は、ひたすらにこの場所を離れたかった。これ以上少女の優しさに浸かっていたら、どうにかなってしまいそうだったから。

扉に手をかけ、もたれ掛かるように押し開ける。

「世話になった。お前も俺のことは忘れてくれればいい」

「……いい加減に、してください」

——どうせもう、出会うこともないのだろうから。

「——いい加減にしてください！」

悲鳴にも似た声だった。切り裂くような音が空気を伝い、男の鼓膜を震わせる。その声が少女から出たのだと理解するには、少し時間がかかった。振り向こうとして、バランスが崩れた。ただでさえフラつく足が絡まり、正体を保てなくなる。体がぐらりと傾き、気付けば音を立てて床に倒れていた。

「——っ！ ほら、だから言ったじゃないですか！ まだ治っていないんですから、じっとしててください！」

少女がよろめきながら男に駆け寄り、体に触れる。声を荒げながらも、患部を探る手つきは随分と優しい。その不器用な優しさに触れて、男の中で何かが溶ける音がした。

——今のは、お前の声に驚いただけなんだが……。

そう口にしようにとして、言ったらまた怒られるのだろうと気付く。言葉を飲み込み、代わりに——。

「そんな声も、出せるんだな」

呆れたように口を開ける少女を見て、男は床に臥したまま小さく苦笑した。

「……と、とにかく！ 出ていくのは勝手ですけど、ちゃんと治ってからにしてください！」

「ああ……すまない、世話になる」

少女の肩に寄りかかってベッドへと運ばれながら——どちらかと言えば引きずられながら——男は諦めと同時に、胸の奥を満たす心地よさを覚えていた。

勝手に出ていく気はすでにどこかに失せていた。

「——なあ、もうやめにしないか」

男が傷の完治を目指し始めてから一月後。夕食どきの——それにしては人気のない店内で、男はため息をこぼしていた。

「何をですか？」

カウンターの奥で皿を洗いながら、少女——シエルが男にそう返す。

「俺の接客だ。お前だって見えているだろう？ 皆が俺を見て、怯え、注文もそこに店を後にする。俺が店に出てから売上が下がり続けていることくらい、俺にだってわかる」

「でもウォーデンさん、料理できないじゃないですか」

「それはそうだが、しかし……」

確かに、男——ウォーデンは全くと言って料理ができなかった。

野盗上がりのウォーデンにとって、料理といえば焼くか煮る、そうでなければ生で食う程度のものでしかない。

香り、味、見た目——気にかけてこともない要素が複雑に絡み合って、ようやく一つの料理が生まれる。焼き加減や温度の調整くらいならまだしも、何種もの食材と香辛料から適切な物を選んでレシピ通りのものを作り上げるなど、到底ウォーデンにできる芸当ではなかった。「とにかく、ウォーデンさんがなんと言おうと、お店は手伝ってもらいます」

そう断言して、シエルは小さな胸を張った。

——実は今家計が苦しくて、しばらく働くのを手伝って欲しいんです。

傷がほとんど完治し、体の感覚も以前と変わらぬものになってきた頃、申し訳なさそうにそう切り出したシエルに対しウォーデンは二つ返事で了承した。ウォーデンが動けない間、食事から何から身の回りの世話は全てシエルにしてもらっていた。精神的にも、金銭的にも、相応な負担をかけたことだろう。

感謝などいくらしても足りない。己にできることな

らばと、ウォーデンは喜んでその頼みを引き受けた。

互いに名前を明かし、幾つかの約束を交わし、いかなる過酷な労働であろうとやり遂げると決意を固め、そして——。

「どうしてその内容が、客の相手なんだ……」

「それはここが私のお店だからで、私が厨房担当だからです」

シエルの経営する酒場にて、ウォーデンは接客を任せられたのだった。二階部分に幾つかの個室を設けた宿屋一体型の酒場。地方の至る所で目にする、スタンダードなタイプの料理店。そんな酒場をシエルは一人で切り盛りしているのだ。

「私がまだ小さかった頃に両親は死んでしまつて。もうほとんど覚えてないんですけど……お店を開きたいつて、三人でよく話してたんです。——だから、私がやらなきゃ、って」

この店で働くこと決まつた時、どこか寂しげな表情を浮かべながらそう語るシエルの横顔を見て、今更約束を違える勇気などウォーデンにはなかった。

常連客をメインとして、たまに旅の商人や流浪人。隣村と強く結びついた、長年の信頼が積み上げてきたのであろう客層。だからこそ、ウォーデンが働くのには最悪の環境と言える。慣れ親しんだ店を訪れたら、昨日まではいなかった強面の男が無愛想に注文を取り始めるのだ。それも傷だらけで、筋肉質の男が。

新規の客は恐れ慄いて店を後にし、常連の客は何事かと怯えシエルの姿を探す。

——苦しい。

己が歓迎されていないことなど嫌でもわかった。だが、今までも他人に好かれようと生きてきたわけではない。他人の評価などウォーデンにとってはどうでもよかった。己がいることでシエルに不利益をもたらしているという事実が、ウォーデンには苦しかった。

——恩を返すどころか仇を積み重ねて、何をしているんだ俺は。

気持ちばかりが逸り、現実が追いつかない。「なぜこんなことに」と自分に問いては、出ない答えにため息をつく。

「やはり、俺がいない方が……」

「だから、そういうことは言わないって約束したじゃないですか」

ウォーデンが店に出るようになってからおおよそ一週間が過ぎた。すでに幾度となく口にした言葉に、シエルは呆れたように釘を刺す。

「悪い癖ですよ。そうやって逃げようとするの」

うぐ、と顎を引きながら、ウォーデンは苦し紛れに言葉を紡ぐ。

「しかし……やはり、俺にはこういうことは向いていない。金を稼ぐだけでいいなら、もっと他にやりようがある——」

「盗賊なりの『やりよう』ですか？」

「……」

「それは、私が許しません。ウォーデンさんには、ちゃんと働いて、お金を返してもらいます」

断固として譲ろうとしないシエルを前に、ウォーデンはもう一度顎を引いた。

「大丈夫ですよ。お客さんだって、ちゃんと説明すれば」

わかってくれてるじゃないですか」

ウォーデンを見て一通り騒ぎ立て、厨房に立つシエルを見つけ、何があつたのかと問い詰め、シエルの説明を受けて渋谷店を後にする。

——あれはわかってくれていると言えるのか？

店を出ていく時の疑心を隠そうともしない瞳を思い出して、ウォーデンは胸中でつぶやいた。

「最初だけです。皆さん、そのうち慣れますから」

「……そんなものなのか？」

「そんなものです」

そう言われてしまえば返す言葉などあるはずもない。この店でシエルと共に働く。それ以外、ウォーデンにできることはないのだ。

「——それはそうとして、やっぱりその見た目は少し怖いのかもしれませんね」

「……………やはりそうか」

「あ、えつと、違うんです。私、そんなつもりはなくて、その……」

いつもより一拍遅れた返答に何を感じたのか、シエル

はしどろもどろになりながら、何度もウォーデンに頭を下げる。さっきまでの威厳は何処へ行ったのやら。ウォーデンの顔に、思わず笑みが浮かんだ。

「いや、気にするな。自分でもわかってのことだ」

そう、そんなことはずっと前からわかっていることなのだ。

「俺は体を守るほど、器用じゃなかったからな」

無鉄砲に突撃を繰り返し、ただ己の膂力で相手をねじ伏せる。急襲され、不意をつかれ、抵抗され——全身に走る無数の傷は、敵地に乗り込むたびに増えていった。

「……その傷も、それでついたんですか？」

ポツリと、シエルがそう呟いた。

「ん？ ああ……」

シエルの視線が指していたのは、ウォーデンの顔にある二筋の傷だった。左目から右目にかけて流れる鼻筋に乗ったその傷は、ウォーデンの顔にある傷の中でも一際特徴的なものだった。

「これは……どうしてだったか」

記憶の糸を辿ろうとするが、どうにも像を結ばない。

もう忘れてしまったのだろうか。いくら思案をめぐらせても、絡まった糸は解けそうにはなかった。

「もう随分と前の傷だ。すまない、覚えていない」

「い、いえ、すみません。嫌なこと、聞いちゃいましたよね」

気まずげに手を振るシエルを見て、ウォーデンは首を横に振った。

「気にするな。理解できんかもしれないが、傷は男の勲章だそうだ。この傷も人に聞かれたのは一度や二度ではない」

「うーん……よくわからないですね……」

シエルの苦笑。どうやら気は楽になったようで、ウォーデンは胸を撫で下ろす。シエルは優しい。優しすぎるが故に、ほんの些細なことで己を責めてしまう。それもまた、この一月で幾度となくあったことだ。そういう時、ウォーデンはできるだけくだらない話を振るようになっている。ユーモアなど話したことはないし、己に話術のセンスがないことも理解している。

しかし、そんなウォーデンの不器用な冗談を聞いて、

シエルはくだらなさそうに笑ってくれるのだ。それがウォーデンにとってはどうしようもなくありがたかった。「まあ、傷ができる理由など、どうせ碌なモノではない。この傷もきつとそうだろう」

指で傷をなぞりながら、ウォーデンはそう呟く。

「思い出せない方が、きつと幸せだ」

それは心からの言葉。全身に幾重にも走る傷——その一つ一つに込められた恨みを、苦しみを、憎しみを、全て背負ってしまったえば、ちっぽけな人間などすぐに押し潰されてしまうだろう。

忘れられるなら、忘れてしまった方がいいに決まっている。

「すまない、お前には関係のない話だったな」

すでに日は落ち切っていた。すっかり無人になった店内に二人の声が木霊する。

「いえ、ウォーデンさんのお話、私は好きですよ」

「……下手な世辞だ」

「もう、茶化さないでください。だってウォーデンさん、自分の話全然してくれないんですもん」

「自分の話……？」

そんな物を聞いて何が面白いのか。ウォーデンはそう思わずにはいられなかった。過去を思い返したところで、脳裏に浮かぶのは汚泥と血みどろに塗れた話ばかり。到底他人が聞いて楽しめるものではないし、ウォーデン自身、話したいとは思わない。

そんなウォーデンの話をシエルは聞いてみたいと言う。それもまた、ウォーデンには理解できない感覚だった。犯罪者の告解など一体誰が聞くというのか。誰も聞かぬから、聖職者が耳を傾けるのだ。汚泥と血みどろをシエルが好むはずもない。ならばなぜ――。

「ウォーデンさんのこと、もっと知りたいですから」

――ああ、そうだ。

ウォーデンは、不器用に笑った。

「お前はそういう奴だったな」

それから幾年もの時間が流れた。とうにウォーデンの傷も治り、シエルの懷事情も片付いた。しかし、それで

もなウォーデンはシエルの酒場で働いていた。何か約束事があったわけではない。取り決めも、契約も、明確なもの、何一つとしてなかった。

ただ居心地が良かっただけだ。

最初の約束はすでに果たしたのだから、いつでも出ていくことはできた。「店を出ていく」と言えば、シエルはきつと彼を止めることはなかっただろう。だが同時に、シエルがウォーデンを店から追い出そうとしないことにもウォーデンは気づいていた。それどころかシエルは、己の道に迷うウォーデンを見つめると笑みを讃えて言ったのだ。

「ずっとここにいてもいいですよ」と。

だからこそ、ウォーデンはその優しさを享受することができた。

一度は拒もうとしたはずの優しさに、いつしかウォーデンは浸り切っていた。

――全く、我ながら吐き気がするな。

客の皿を下げながら、ウォーデンは胸中でつぶやいた。だが不思議と嫌悪は訪れない。心に渦巻くのは心地よい

安堵だけで、それにもすっかり慣れてしまった。

以前あれだけ怯えていた客たちはすっかりウォーデンに気を許し、今では酒の席に誘いをかけるほどである。中には、「強面の従業員」を目当てにやってくる新規の客もいるほどで、可愛い厨房の少女と無愛想で不器用な接客の男の凸凹コンビは巷でもそれなりに知名度を上げていた。

変化があったのは何も二人を取り巻く環境だけではない。シエルと過ごす月日を重ねるごとに彼女に対する感情が姿を変えていったことを、ウォーデンは誰よりも理解していた。

シエルという少女は気丈夫な人間である。幼い頃に両親を亡くし、身寄りもなく、血のつながりのない知人を転々としながら暮らしてきた。その中で幼いながらに確固たる自意識が芽生えたのは、自然なことと言えるだろう。

その結果が件の酒場である。

商品を仕入れ、調理し、客を相手し、金銭を管理する——その全てを、たった一人で切り盛りする。それは本来、成人すらしていない少女には到底不可能なことだった。故にウォーデンは当初、彼女のことを尊敬すらしていた。だが、時間が経つにつれその認識は次第に変化する。尊敬の念が消え失せたわけではない。ただ、彼女が一人の少女であることを理解したのだ。

何のことはない。シエルはただ「大人びている」だけである。生きるために、生活をするために、大人のふりをしているだけなのだ。子供のように失敗し、子供のようにつまづき、子供のように道を見失う。その度に彼女は、そばに立つ誰かの手を借りて再び立ち上がり、歩き始めるのだ。

共に掃除をし、食事をした。共に買い物に出かけ、帳簿を見つめた。不躰な客の相手をし、料理を教えてもらい、病に臥せば看病をした。

シエルと共に昼夜を過ごし、彼女の強さを知り、弱さを知り、己の強さを晒し、弱さを晒し、そしてウォーデンはようやく胸に抱える歪な感情を理解する。

どうしようもなく、彼女に恋をしているのだと。

だからこそウォーデンは心に決めた。シエルが成人を迎えて二度目の春の日——ウォーデンが彼女と出会ってからちょうど五年目の夜に、彼女に想いを告げようと。

「俺と、結婚してほしい」

陽が落ち、客が姿を消した酒場の中——翌日の仕込みもあらかた過ぎ、今日はもう店じまいといった頃ウォーデンは意を決してシエルに思いの丈を明かした。情緒もムードもない、無骨に放たれた愛の言葉。ウォーデンとて、そこに迷いがなかったわけではない。

だがずっと昔から、ウォーデンはそうして生きてきた。周りくどいことはせず、いつだって真正面から己の力一つだけで道を切り開いてきた。

だから、今回も同じことをするだけだった。

「ずっと、待ってたんですからね」

——ああ。

そんな不器用なウォーデンに、シエルはいつだって向

き合ってくれたのだから。五年の月日が生んだ信頼など、もはや疑う方が難しい。

——これが、幸せなのか。

クシャクシャの泣き顔で、しかし笑顔を湛えながらそう零す彼女の姿を見て、ウォーデンは己の選択が間違っていないかったことを知った。

「式をしたいんだ。大袈裟なものじゃなくていい。お前のために何かさせてくれ」

「嬉しい、です。あ、あの……それなら、明日とかどうですか？」

「明日？ 急すぎやしないか？ 服を用意したいんだ。寸法を測って、仕立ててもらう。悪いが到底一日じゃ……」

「えっと、実は——」

シエルは徐に立ち上がり衣装棚の扉を開くと、奥から一着の服を取り出した。簡素ながら品位のある雪色の布——新婦が着るにふさわしい、純白のウェディングドレスを。

「ずっとお金を貯めてて、この前買ったんです。いつか

着れたらいいなって」

頬を赤らめながらシエルは小さな声で語る。

「ウォーデンさんが言ってくれなかったら、私から言うつもりでした。だから、すごく、嬉しいです」

「——明日」

彼女の提言を断る道理など、もはやどこにもなかった。
「その服を着て、俺の前に立って欲しい」

ウォーデンは決意する。明日、淡い笑みを浮かべたこの少女の前で、永遠の愛を誓おうと。

「……あの、ウォーデンさん。一つ、お願いがあるんです」

ふと幸せそうな笑みから一転、シエルは顔を俯けると、自信なさげにウォーデンへと声をかけた。それはまさに恐る恐るといった様子で、見れば所在なさげとでも言いたげに指を絡ませては解いている。

「なんだ？」

自然、対するウォーデンの声も自ずと不安げなものとなる。

——何か納得していない部分があるのだろうか。

シエルの意思を縛るつもりなどウォーデンには毛頭ない。心変わりが起きたなら甘んじて受け入れるだけの覚悟はできていた。シエルは意を結したように顔をあげ、ウォーデンを真っ直ぐに見つめた。一度唇を噛み、そして——

「私のこと、ちゃんと名前前で呼んで欲しいんです」

二人の間に数度風が吹いた。

「何を……お前の名前ならば、ちゃんと覚えている。シエルだろう？」

「それ、そうです。ウォーデンさん、私のことずっと『お前』って！ そうじゃなくて、ちゃんとシエルって言うて欲しいんです」

——ああ、なるほど。

「……『お前』ではダメなのか？」

「ダメです」

——今なら理解できる。

「ダメなのか……」

「ダメです！ というか、何笑って……さてはわかってやってますよね。私、怒りますよ？」

その言葉でようやく、ウォーデンは己が笑っていたことに気付いた。

「ああ……すまない、そうだな、名前か。お前の言う通りだ」

「だからあ……!!」

「あ、いや、すまない。今は、その、わざとではないんだが……」

「……もう知りません。私もこれから、ウォーデンさんのことは『お前』って言いますから」

——勘弁してくれ。

拗ねたようにそっぽを向くシエルの機嫌をとりながらも、ウォーデンは胸中で苦笑していた。

——確かに俺も、お前からは名前で呼ばれたいものだ。

「——何笑ってるんですか？」

「ああ、いや。昨日のことを思い出していた」

結局あれから、一度もシエルはウォーデンを名前で呼んではくれなかった。それがシエルなのからかいであ

ることはウォーデンも理解しているのだが、とはいえ過去の己を責められているようで、なんだかひどくむず痒い。

「そんなことより——」

唐突、シエルが腰掛けていた椅子から跳ねるように立ち、ウォーデンの前に立った。

「どう、ですか？ 私、変じゃないですか？」

そう言うと、シエルは服の裾を指で摘み、クルリとその場で体を捻らせる。純白と呼ぶにふさわしいシエルの姿。新雪のようなドレスに、金色の髪と瞳——その全てが鮮やかな輝きを伴って陽の光に照らされている。

「ああ、似合ってる。……綺麗だ、シエル」

ふわりと空気が揺れ、甘い香りが辺りに漂った。ウォーデンが紡ぐのはありきたりでしかない不器用な言葉。しかしシエルはそんなウォーデンを見て、くしゃりと顔を綻ばせた。

すでに日は高く辺りには涼しげな風が吹いている。いつもならば店を開いている時間だったが、今日は違う。二階の一室で二人は手近な椅子に腰掛けていた。階段越

しに階下を見れば、見慣れた面々が特等席を巡って何やら言い争いをしている。とある男女の結婚式を一目見ようと隣村から押しかけた群衆だ。

——昨日の今日で、一体どこからかぎつけたのやら。

「賑やかだな」

「そうですね……嫌でしたか？」

ウォーデンは群衆が得意ではなかった。人の波を見ていると、かつての嫌な記憶が呼び覚まされるようでどうにも気分が悪くなる。

だが今日だけはそんなくだらぬ物言いをするつもりはない。

「いや、ありがたい限りだ」

押し寄せる人の波の全てが、横に座る少女が生んだ努力の結果だと思えば、嫌悪を抱けるはずもない。そしてその努力の一端に、己がいるのであればなおさらだ。

「……そろそろ、行きましようか」

「ああ、そうしよう」

どちらからともなく手を伸ばす。指先が触れ、絡まった。心地よい温もりを感じながらウォーデンは一步を踏

み出す。階段を降りる二人の体は、割れんばかりの拍手に包まれていた。

「——互いの体に、傷を？」

「はい。この辺りに伝わる風習というか、伝統で」

細い果物ナイフを手にしたシエルがウォーデンに声をかけたのは、式も終盤になった頃だった。

「なんというか、随分と物騒な伝統だな」

「昔はそれこそ切り傷や刺し傷もあったらしいんですけど、今はもう『指先にちよつと傷をつける』程度のものなので」

「なるほど……俺は構わんがシエルはいいのか？ 指

先とはいえ、傷が残りでもすれば……」

受け取った果物ナイフを指で遊ばせながら、ウォーデンは思案する。己の体に傷が増えようが今更気に留めることはない。だがシエルの体は未だ傷ひとつなく無垢なままだ。触れれば消えてしまいうようなほどに、白く、儚く、美しい。いくら伝統とはいえ、傷をつけることなど

進んで望むことはできなかった。

「残すための、傷なんです」

だがシエルは、ウォーデンの懸念を払うように瞑目し、言葉を紡ぐ。まるでそれが己の願いと言わんばかりに。

「——永遠の愛の証として、互いの体に忘れられない傷をつける。それが、この儀式の意味ですから」

「……随分とロマンチックだな」

「嫌でしたか？」

「……いや」

軽く首を振り否定する。

——今日くらいはそういう気分になるのも、悪くない。

「手順はあるのか？　こういう風習には疎くてな、勝手がわからん」

「まずは新婦が先に、その後に新郎が」

「なら、よろしく頼む」

シエルはウォーデンからナイフを受け取ると、重く長い息を吐いた。

「その……痛くしてしまったら、ごめんなさい」

よく見ればその手は小さく、しかし確かに震えている。

「気にするな。傷には慣れている。それに——」

ふと、ウォーデンはそこに己の掌を重ねた。少し冷たさを覚えながらウォーデンは口を開く。

「傷は男の勲章だ。惚れた女から受けた傷なら、尚更だろう」

温もりが伝い、体温が混ざり合う。

「……ふふ。そうですね」

いつしか震えは止んでいた。シエルはナイフを握りなおすと、気合いを入れるようにガッツポーズを取る。

「私、頑張りますから、よろしくお願いします！」

「ナイフを持って言うと、まるで人でも殺すようだな」

「……………刺しますよ？」

「……勘弁してくれ」

視線の先——己の指先に浮かぶ赤い血球を見つめて、ウォーデンは不意に息を吐いた。ゴツゴツとした指先にボツリと現れた、小さな赤い点。それが次第に細く線を引いて、指裏へと垂れる。

「あの、だ、大丈夫ですか？ ええっと、何か拭けるもの……」

「気にするな。このくらい、すぐに塞がる」

そう言つてウォーデンは、指を伝う赤い液体を指先ごと舐めとつた。

「もう、そんな適当なことしたら、傷になりますよ」

「残すための傷なのだろう？ むしろ正しい応急処置だ」

儀式は随分あっさりと、少しの痛みも伴わずに終わりを告げた。

指先の皮膚を破る淡い感覚が刹那に訪れ、消え去る。

「こんなものでいいのか」とウォーデンは首を傾げたくすらなつた。むしろナイフを持っていたシエルの方が焦燥し、疲弊していたほどだ。

「……本当にいいんだな？」

シエルが平静を取り戻したのを確認し、ウォーデンは彼女からナイフを受け取る。

「はい。私だけ逃げたりしたら忘れたい思い出になっちゃいますから。どんと来てください。あつても、痛くな

いようにしてくれたらその……嬉しい、です……」

「……努力する」

口では気丈に強がりながらも震えるシエルの腕を取り、細い指先にナイフを添える。慎重に、繊細に——できるだけ力を込めないように、ナイフにかかる圧を増やす。ぷつり、と僅かな抵抗があつた。

「——っ」

糸を割くような細い声が、ふと耳に届いた。絹のように白い肌に、赤い一粒の鮮血。ほう、と息を吐き、添えていたナイフを指から離す。用意されていた布を素早く指先に被せ、無駄な出血を防ぐ。

「——すまない、痛かったか？」

慌ててシエルの方を見やれば、ウォーデンの心配に反して、彼女は朗らかに笑つていた。

「……少し。でも、嬉しかったです」

幾度となく見惚れた、幸福を絵に描いたような笑みだつた。

——終わってしまったえば随分とあっさりとしたものだな。

ふとウォーデンは、未だ手に持ったままのナイフに目をやった。

「これで、ようやく終わったのか」

昨晩の準備に始まり、突然に決まった「儀式」まで——予定にあることから、予定になかったことまで、全てが終わった。一生に一度の記念日は幕を閉じ、明日からはまた何気ない日々が始まる。たった一つ違うことといえ、これからは二人が紛れもない夫婦であると言うことだけだ。

——照れ臭いような、誇らしいような。不思議な気持ちだ。

柄にもなくウォーデンは感傷に浸る。シエルと歩んできた今までの歳月に——その思い出に溺れる。

——まさかこんな人生を歩むことになるとは。

盗賊として血みどろの中で暮らしていた頃には想像すらしてこなかった。愛した誰かと皆に祝福されながら幸せを誓うなど、できるはずがないと信じていた。幸せなど得られるはずがないと、そう思って生きてきた。どこか現実離れたふわふわとした心地で、ウォーデンは

己の今を噛み締める。

「ええ、本当に」

だからだろうか。

「本当に、これで終わりです」

眼前から倒れ込んできたシエルの体を、避けることができなかったのは。

ズクリ、と鈍い音がした。鉄が肉を裂く音なのだと気づくまでに随分と時間がかかった。幾度となく聞いてきた音のはずなのに、思考が結びつかなかった。結びつくことを拒んでいた。目の前の現実を理解したくなかった。

「——え？」

ウォーデンの手に、べっとりとした何かが付着する。それは止めどなく何処から溢れ出し、ウォーデンの腕を、服を、全身を赤に染め上げる。

「——何、が」

わかってる。理解している。ただ、信じたくない。だがどれだけ拒もうと、腕が震えるたびに伝わる肉を裂

く感触がウォーデンに現実を告げていた。震える体で、回らない頭で、それでもなお現実を直視できたのは、果たしてウォーデンの強さ故なのだろうか。

ウォーデンの視界がゆっくりと下を向き、ピッタリと密着する二人の隙間へと吸い込まれる。視線が己の腕から指先へと移り、そして――

「痛くないでって、言っただんです、けど、ね」

シエルの胸に深々と突き刺さる細いナイフが瞳に映った。

「――シエ……？　なん、で」

口が回らない。ウォーデンは微塵の痛みも覚えていないはずなのに、何も喋れない。言葉を忘れてしまったかのように、ただ意味をなさない言葉の切れ端を泡のように放つことしかできない。一步、怯えるようにウォーデンは後ろによるめいた。途端にシエルの体から腕が離れ、またグズリと音がする。

支えを失ったナイフが音を立てて床へと落ちた。次い

でシエルの体が緩やかに崩れ落ちる。どさりと重い音がした。

「――シエル？　シエル！　シエルっ！」

ウォーデンの体が弾かれたように動く。シエルの元へと駆け寄り乱暴に体を揺する。シエルの体が揺られるたびに彼女の体から溢れ出る赤色が床を濡らし、不気味な池を広げていく。純白だったはずのドレスはすでに夥しいほどの赤に濡れていた。

「――昔、」

ふと、シエルの口が力なく動いた。

「お父さんとお母さんが、殺されたん、です。村を、襲った、盗賊達に。皆殺し、だった。生き残ったのは、怖くて隠れてた、私、だけ」

掠れるような声だった。弱々しく今にも消えてしまいうような、聞き取るのがやつの小さな声。けれどなぜか、ウォーデンにはその声がよく聞こえた。聞こえてしまった。

「真っ暗で、怖くて、それに私、は、まだ小さかったから、どこの誰がやったのか、なんて、分からなかった」

「やめろ、話すな」

勿体ないと言いたげに、ウォーデンが床に広がる血の池をかき集める。両腕を精一杯に使って、何度も、何度も、何度も。

「話さないでくれ。もう、これ以上は……………」

——早くあるべき所に返さなければ、どこかへと消えてしまいそうで。

それはまるでジュースをこぼした幼子のように愚かで、無様な姿だった。

「でも、たった一つだけ、覚えている、ことが、ある、んです」

シエルの口が藻掻くように動いた、ごぼりと鮮血が溢れる。

口から、胸から——シエルの体に開かれた穴から、止めどなく赤色が流れ出す。

「忘れようと思って、も、忘れられない、私の思い出。目の前で、心臓、を、貫かれた、お母さんが、それでも、藻掻いて、藻掻いて、藻掻いてできた——」

シエルの瞳が力なく動きウォーデンの視線と交差す

る。輝きなどとうに失われた、暗く霞んだシエルの瞳。弱々しい動きのはずなのに、ウォーデンは逃れることができなかった。

「その、二筋の、傷を」

「——お前、は」

ふと、シエルの瞳が哀愁にも似た色を帯びた。

「会えないなら、会えないで、よかったん、です、けど……………」

でも、会っちゃいました、から——

憐れむような、懐かしむような、愛おしむような——

笑顔にも似た、残酷な色。

「ほら、私の顔、もつとちゃんと、見てください。惚れた女の、顔なんです、から」

横たわるシエルの腕が徐に動いた。力など入らないはずなのに、耐え難い苦しみのはずなのに、シエルは薄い笑みを浮かべながら片手を持ち上げる。

「ウォー、デン、さん、言って、ましたよね。苦しい思い出は、思い出せない、方が、幸せだって」

赤に浸った細い指先がウォーデンの頬に触れた。

「だから、忘れさせ、ません」

指先は凍えるように冷たく、すでに脈動はない。まるで死者を手招く死神のように、冷たく、淋しい、真っ白な指。

「ずっと、私を、忘れ、ないで」

眠りにつく前に愛する誰かの頬を撫でるように、シエルの指が優しく動く。

「——あなたが、私を、殺した、ん、だから」
赤色の海に、腕が落ちた。

部員紹介（掲載順＋α）

ペンネーム

- ① 所属
- ② 兼部（任意）
- ③ TMU 文藝部で今後していきたいこと
- ④ 好きな本・ジャンル

の順に掲載しています。

風影露

- ① 理学研究科生命科学専攻1年
- ② 無し

③ 本を読む会など、部員の皆さんと一緒に活動できるのが楽しみです！今年こそこたつを出したいですね♪

④ 広く浅くなんでも読みますが、特にファンタジー、SF、ミステリーが好きです！

五月蛍

- ① システムデザイン学部電子情報システム工学科3年
- ② A.T.L.

③ 連載小説の掲載

④ 魔法とか出てくる淡々とした世界観のハイファンタジーが好きです。ライトノベルだと無職転生、漫画だと葬送のフリーレンなど。

野本ひつじ

- ① 人文社会学部人間社会学科2年

② 無し

③ ビブリオバトル

④ 辻村深月さんの本全般

狼月

- ① 人文社会学部人文学科4年

② 支援スタッフ

③ いろいろな小説の執筆に挑戦すること

④ ファンタジー

三波ケイ

① 経済経営学部4年

② 無し

③ 1か2作品ほど小説を書く

④ スポーツ・青春

浅野覚醒

① システムデザイン学部機械システム工学科2年

② 将棋部

③ 色んなジャンルの作品を今年こそ書く

④ SF・ホラー・ミステリ

◇連絡先一覧◇

TMU 文藝部公式ホームページ
<http://tmubungei.ninja-web.net>

首都大学東京文藝部『語り月夜』
<http://tmubungei-yue.seesaa.net>

TMU 文藝部公式 Twitter：東京都立大学文藝部
@tmulc

メールアドレス
tmulcbungei@gmail.com

奥付

青衿 2023 春号
2023 年 4 月 5 日発行

◇執筆者◇

風影露

五月蛭

◇編集者◇

五月蛭

◇発行元◇

東京都立大学文藝部
学生ホール 424 号室・内線 2446 番

◇連絡先◇

前ページに記載

